小学校

平成8年度

教育研究員研究報告書

特別活動

東京都教育委員会

平成８年度

教育研究員名簿

	地区名	小学校名	氏名
学級活動・低学年	大田区	高畑小	横越　光伸
	杉並区	和泉小	青木　陽子
	葛飾区	東綾瀬小	北峰　清美
	江戸川区	船堀第二小	濵淵　雅子
	町田市	成瀬中央小	増田　春代
	多摩市	永山小	○増島　勲

	地区名	小学校名	氏名
児童会活動	新宿区	鶴巻小	荒井　浩子
	品川区	第二延山小	伴野　恵子
	中野区	新井小	小林　郁枝
	豊島区	目白小	◎手代木麗子
	武蔵村山市	第八小	岩清水克美

	地区名	小学校名	氏名
学級活動・中学年	江東区	真砂小	坂田　光彦
	練馬区	八坂小	石坂恵美子
	足立区	大谷田小	萩原　彩
	八王子市	南大沢小	今永　紀子
	立川市	南富士見小	鈴木純一郎
	調布市	杉森小	○清水　吏
	国分寺市	第四小	鈴木ヤチ子
	清瀬市	清瀬第七小	友辺　新衛
	稲城市	長峰小	菅谷万里子

	地区名	小学校名	氏名
学校行事	大田区	入新井第四小	○中村　一久
	世田谷区	八幡小	岡野　範嗣
	板橋区	成増ヶ丘小	阿部　誠一
	三鷹市	大沢台小	長田　容成

◎　全体世話人

○　分科会世話人

	地区名	小学校名	氏名
学級活動・高学年	世田谷区	守山小	三間　映子
	北区	滝野川第二小	横矢　弘
	板橋区	稲荷台小	大野　正人
	練馬区	開進第二小	○小寺　康裕
	足立区	亀田小	小林　千枝
	江戸川区	西葛西小	関口　敏子
	八王子市	愛宕小	藤本　悦子
	調布市	第一小	鈴木　誠一
	狛江市	狛江第三小	鈴木えり子

担当　　教育庁指導部主任指導主事　　羽田　保

平成８年度　教育研究員（特別活動）共通研究主題

一人一人のよさが生きる集団活動を通して，児童の自主的，実践的な態度を育てる指導の工夫

目　　次

Ⅰ　研究の大要 …… 2

Ⅱ　「やってみようよ　みんなといっしょに」
子供と楽しくつくる学級活動
（学級活動・低学年分科会）…… 3

Ⅲ　学級集団の高まりを目指し，一人一人が生きる学級活動
── 話合い活動を通して ──
（学級活動・中学年分科会）…… 7

Ⅳ　一人一人が生きる楽しい学級活動
── 係の活動を通して ──
（学級活動・高学年分科会）…… 11

Ⅴ　児童が主体的に取り組む児童会活動
── 課題意識を高め，協力し合う児童会活動の指導の工夫 ──
（児童会活動分科会）…… 16

Ⅵ　行事精選の中で，児童の心に残る学校行事にするための事前・事後指導
（学校行事分科会）…… 20

＜要　約＞

特別活動は，望ましい集団活動を通して，児童一人一人が自分のよさや可能性を発揮できるようにするとともに，友達のよさも認め合える場を確保し，学級生活や学校生活を更に向上させようとする自主的，実践的な態度を育成することが必要である。そこで本年度は上記の共通研究主題を設定し，児童の側に立つ指導の工夫を探ることとした。

研究の推進に当たっては，特別活動の活動内容に則して５つの分科会を構成した。各分科会では，現状の特別活動実践上の課題を踏まえ，具体的な研究主題を設定した。さらに，日常の実践を重視し，児童の姿をとらえながら指導の工夫について考察したものである。

Ⅰ　研　究　の　大　要

共通研究主題

一人一人のよさが生きる集団活動を通して，
児童の自主的，実践的な態度を育てる指導の工夫

携帯電話の普及，テレビゲームの発達など，科学技術の急速な進歩に加え，核家族化，少子化，地域社会の連帯感の希薄化などの現象が更に進みつつある今日，学校週５日制の時代を迎え，学校教育の根本的な在り方が問われるようになってきた。

こうした社会の変化により，子供相互の人間関係が希薄になったり，体験を通した活動が不足したりするなど，子供の生活のみならず，ものの見方や考え方は大きく影響を受けるに至っている。いじめ，登校拒否（不登校），非行の低年齢化など，子供たちをめぐる様々な問題を認識するとき，学校は，集団での多様な活動を通して，人間，自然，社会，文化などの対象に進んでかかわり，そこにある課題などを見いだし，それらを解決したり，実現したりする資質や能力を重視することが大切であると考えられる。

特別活動部会では，望ましい集団活動を通して，児童一人一人が自分のよさや可能性を存分に発揮できるようにするとともに，友達のよさを認め合える場を確保し，自分たちの学級や，学校生活を更に向上させようとする自主的，実践的な態度を育成することが急務の課題であると考え，本研究主題を設定した。

以上の研究主題設定の理由を基に，本年度は下記のことに重点を置いて研究することとした。

・　児童が課題意識をもって取り組み，一人一人が自分のよさに気付き，創造力を発揮しながら意欲をもって活動できるような場の設定や支援，評価の在り方を工夫すること。
・　望ましい集団活動を通して，互いのよさを認め合い，高め合っていくことができる人間関係を育成すること。
・　一人一人が個性を生かしながら，役割を分担して活動できる場を確保し，児童の自己実現への支援を追求すること。
・　意図的，計画的な指導の下に，ゆとりのある活動を精選すること。

なお，研究を進めるに当たっては，各分科会が，次のような研究主題を設定し，共通研究主題に迫ることとした。

・学級活動・低学年分科会　「やってみようよ　みんなといっしょに」
子供と楽しくつくる学級活動
・学級活動・中学年分科会　「学級集団の高まりを目指し，一人一人が生きる学級活動」
－話合い活動を通して－
・学級活動・高学年分科会　「一人一人が生きる楽しい学級活動」
－係の活動を通して－
・児童会活動分科会　「児童が主体的に取り組む児童会活動」
－課題意識を高め，協力し合う児童会活動の指導の工夫－
・学校行事分科会　「行事精選の中で，児童の心に残る学校行事にするための
事前・事後指導」

Ⅱ　「やってみようよ　みんなといっしょに」
子どもと楽しくつくる学級活動

（学級活動低学年分科会）

1　主題設定の理由

第１５期中央教育審議会答申の中に，自らを律しつつ，他人と協調し，他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性の育成がうたわれている。ここで求められているのは，児童自らを思考・行動主体として育成し，自己実現を図ること，また，よりよい人間関係の育成が主眼であると考えられる。

さて，ここで低学年という発達段階における児童の実態に目を向けると，以下のような顕著な点が挙げられる。

・恣意的な態度を押し通すのみでは周囲に受け入れられないことが分かり，自己主張と協調性とのかかわりを学びとろうとしている。
・集団遊びに対する関心が高まり，仲間意識が芽生え始めている。
・身体表現を好み，活動的，行動的である。
・興味，関心が多岐にわたり，おう盛な好奇心をもっている。
・自己中心的ではあるが，自分をみつめたり，友達との違いに気付き始めたりしている。

つまり、おう盛な活動意欲をもちながら，集団形成の基礎作りをする段階であると言える。集団形成においては，互いに支え合う，認め合うという支持的な風土作りが大切になってくる。そこでは，低学年なりに自己を見つめ，他と協調し，他を思いやる心情が培われなければならない。

とかく，入門期の指導では，教師主導となりやすく，ともすれば与えられた学級活動になってしまう傾向もある。そこで，児童の実態に見られるおう盛な活動意欲を基礎として，教師は，児童自らの気付きを大切にしながら児童とともに作り上げる学級活動を展開し，よりよい人間関係の形成を目指したいと考え本主題を設定した。

2　研究仮説

活動目標の共有化を図り，相互理解を深め，児童自らの気付きを大切にした指導の工夫をすれば，所属感が高まり，よりよい集団が育つであろう。

3　研究の視点

1　活動目標を共有化させるための工夫

①　児童と一緒にクラスのめあてを作る。
②　本時の活動目標を確認する。
③　話し合いの約束を児童と作る。

2　相互理解のための工夫

① お互いの良いところを探し合う。

② 友達に対する思いやりの言葉や行動をカードにして提示する。

③ 学級活動の終末に，振り返りの時間を設定する。

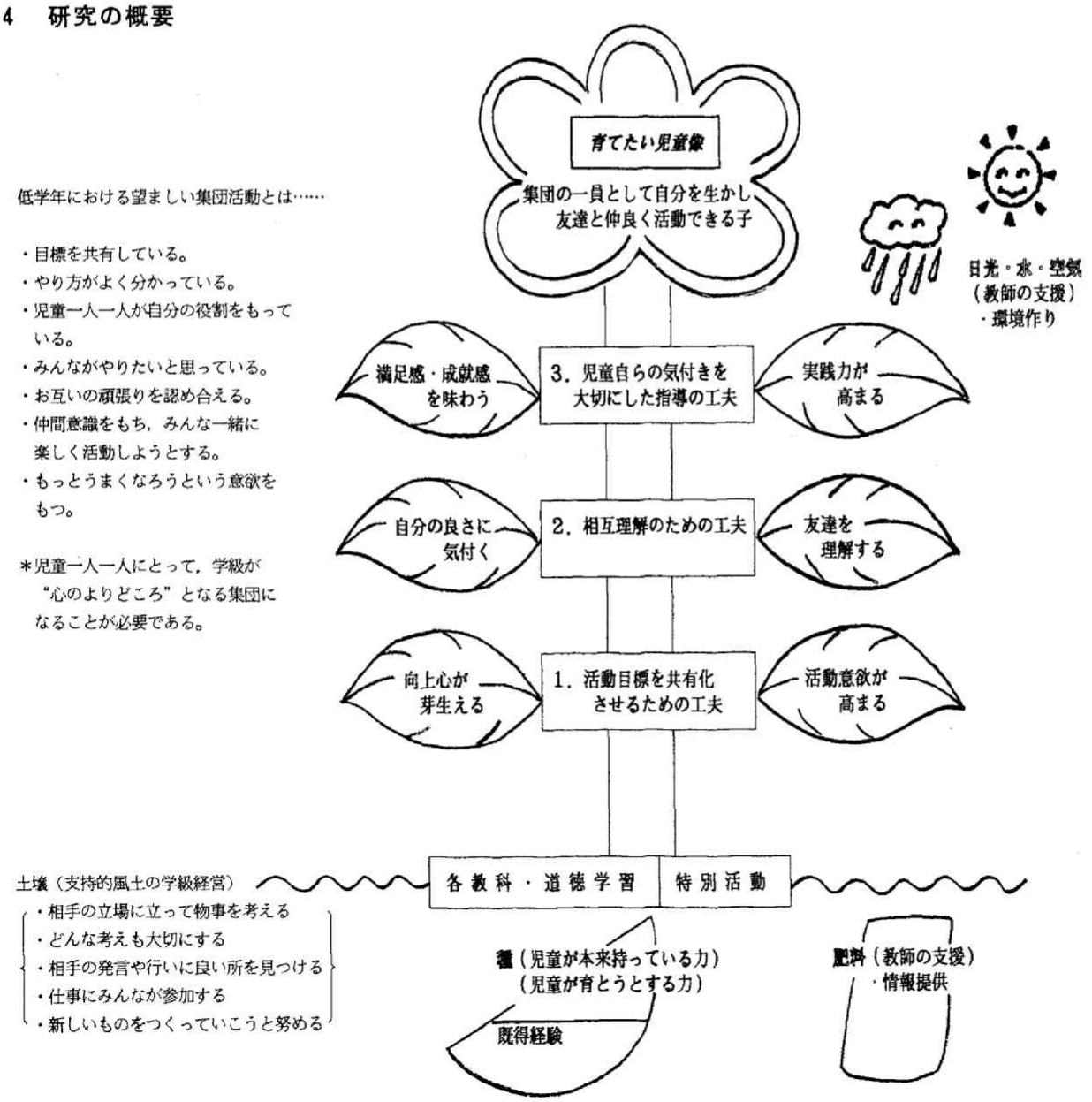
3　児童自らの気付きを大切にした指導の工夫

① 自由な活動ができる時間と場を設定する。

② 児童のつぶやきを拾い上げ，クラス全体に知らせる。

③ 所属意識を視点とした活動記録を工夫する。

4　研究の概要



5　研究内容

〔視点１〕活動目標を共有化させるための工夫

・児童といっしょにクラスのめあてを作る。

年度当初「こんなクラスにしたいな」と題材を設定したり，「このクラスはどんなクラス？知らない人に教えてあげよう」と意見を求めたりして，低学年なりのクラスのめあてを意識させる時間を作る。そして，児童から出てきた言葉をめあてとする。

・本時の活動目標を確認する。

児童が活動する目標を初めに確認し合い，児童中心の展開を意識させる。

（例）Ｔ「今日は何について話し合うのかな？」

Ｃ「○○です。」

・話合いの約束を児童と作る。

（例１）

（例２）

5/17　ひとりでもはんたいするひとがいたらなんとかする

5/28　わけをかならずいう

6/13　ひとがいっているときはしずかにさいごまできく

6/13　かならずてをあげていう

6/28　まえもってじぶんのいけんをかんがえておく

7/6　やすみじかんにいけんの　グループわけをしておく

9/24　きまらないときはあとまわし

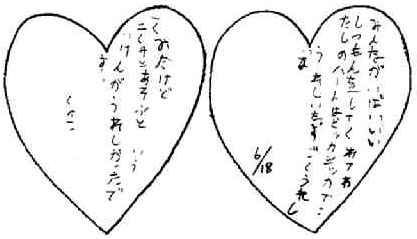
〔視点２〕相互理解のための工夫

・良いとこさがし

話合い活動や実践活動の終わりに１時間を振り返り，活動の良かった点，友達の頑張っていた点などを発表する時間を設けて，クラスの中の友達に目が向けられるよう配慮した。

・友達に対する思いやりの言葉カード掲示

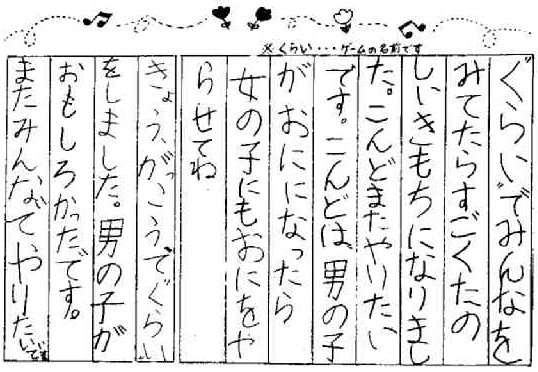
（例）



短冊やハートカードに書いていつでも見えるように，学級活動コーナーに掲示する。

・振り返りの時間を設定する。

（例）



児童が気がつかなかった良い所を，教師が見つけてほめる。

学級会のことを日記形式に書かせ，児童の思いが出ているものを全体に紹介し，互いの理解を深める。

〔視点３〕児童自らの気付きを大切にした指導の工夫

・自由な活動ができる時間と場を設定する。

教師の手を借りずに児童だけで活動する時間を確保する。

人権，安全にかかわること以外は，指導，助言を控えて，児童の気付きを待つ。

教師と児童で振り返る時間を確保する。

0分	3分	35分	45分
↑	児童に任せた活動（話合いの流れは児童に任せる）	教師と児童で振り返る活動	

└ 教師と児童でめあての確認

・児童のつぶやきを拾い上げ，クラス全体に知らせる。

（例）「ゆずった人がかわいそう」

「ばらばらでやったらだめなんだよ。」

・所属意識を視点とした活動記録を工夫する。

（例）話合いの記録　　月　日（　）司会　　議題　○○君のかんげい会をしよう

集団を意識した発言や行動	思いやりにかかわる発言や行動	話合いの約束にかかわる発言や行動
・リレーはやりたくない人もいると思います。 ・いすとりはみんながおもしろそう。	・○○君のやりたいものをやったらどうですか？ ・いろんなゲームを教えてあげたい。	・手をあげて言ってください。 ・ほかに意見はありませんか？

6　まとめと今後の課題

(1)　研究の成果

・　学級目標を児童と一緒につくり上げたり，活動目標を明確にすることで，児童の活動意欲が高まった。

・　相互理解のために，お互いの良いところを探し合ったり，友達に対する思いやりの言葉や行動をカードにして掲示したことで，友達の考えを聞こうとしたり，違う考えを認められるようになり，自然な気持ちで譲ることができるようになってきた。その雰囲気の中で，みんなに認められていると実感でき，自分の考えや思いを素直に表現できるようになり，集団への所属意識も高まってきた。

・　児童が自主的に活動できる場を保障したことで，自分たちでやっているという実感がもて，クラスの一員として役割を果たしたいという気持ちが高まった。また，話合いを重ね，自分からやってみようという意識も芽生えてきた。

・　今回の実践を通して，児童の生の姿が見え児童のつぶやきに耳を傾ける姿勢が一段と強まり，児童の新たなよさを見いだすことができた。

(2)　今後の課題

児童が自主的に活動している過程でいかに適切に指導助言をするかが課題である。

Ⅲ　学級集団の高まりを目指し，一人一人が生きる学級活動
― 話合い活動を通して ―

（学級活動中学年分科会）

1　研究主題設定の理由

中学年になると，学校生活にも慣れ，グループや学級集団とのかかわりに強い関心をもつようになってくる。そして，交友範囲が広がり，友達や学級集団を通したものの見方や考え方ができるようになる時期でもある。集団による活動が活発化してくると同時に，小集団の分立により学級全体としてのまとまりが必ずしも十分ではないことも見られる。好きな友達，気の合わない友達などもはっきりしてきて，相手の欠点を批判するような態度をとったり，大人に対しても批判的な芽が出てくる時でもある。一方，自己中心的であった低学年の時期から，自分を少しずつ客観視できるようになるのもこの時期の特徴と言えよう。

子供たちの興味関心が高まり，語いの増加とともに，話すことに積極的になってくる。こうしたことから学級活動の話合い活動も活発になる。しかし，自分の考えだけを主張することに夢中になっている子供も多くいたり，逆に，思っていても集団の中でなかなか発言できないという子供もいたりする。また，係の活動や集会の活動を好む子供は多いが，学級全体で協力し合ったり，助け合ったりするという意識は十分に育ってはいない。進んで活動したり，工夫して活動したりしているという意識も同様である。これは，人間関係が希薄であることと，主体的に問題解決に取り組もうとする力が不足していることの表れである。

そこで，一人一人が役割を果たしたり協力し合えるような学級，あるいは，目標に向かって生き生きと活動できるような学級を作っていくことが重要であると考えた。そして，このような学級集団の高まりを目指し，一人一人が生きる学級活動を展開することで，子供の自主的，実践的な態度が育成されると考え，本主題を設定した。

学級活動では，話合いが基盤となり係の活動や集会の活動などの様々な自主的な活動が展開される。そのため，話合い活動を通して研究を進めることとした。

2　研究仮説と研究の視点

分科会研究主題の「集団の高まり」と「一人一人が生きる」を次のようにとらえた。

「集団の高まり」とは…

○互いにかかわりをもつ。
○集団の中で役割を果たす。
○目標を共有化する。
○思いや願いを大切にし合う。
○協力し合う。
○みんなでやる気をもつ。

「一人一人が生きる」とは…

○安心できる。
○自信をもって活動できる。
○よさを伸ばそうとする。
○喜びや充実感を感じる。
○自分で問題を解決しようとする。
○自分が必要とされていることを感じる。

学級集団を高めるためには，その学級を一人一人のよりどころとなる集団に変えていくことが大切なこととなる。

このような集団は，一人一人が生きる学級活動を行うためにも必要不可欠である。また，自分たちの力でやり遂げられたという楽しさや満足感を味わうことも，子供たちにとっては大切なこととなると考えた。

そこで，中学年分科会では，研究仮説を次のように設定した。

研究仮説

1　よりよいクラスにしようという意識をもつ。

2　互いの思いや願いを大切にする。

3　楽しさや満足感が得られる話合いや実践をする。

以上の指導の工夫をすれば，学級集団の高まりを目指した，一人一人が生きる学級活動になるだろう。

そして，研究の視点と具体的手だてを設けて研究を進めることとした。

《視点１》　よりよいクラスにしようという意識がもてるための工夫

①　クラス目標（学級集団目標）の意識化

・よりよいクラスにするために，子供たちの願いを反映させた目標を設定する。

・設定したクラス目標を掲示し，意識の継続化を図る。

・学級生活の充実・向上に目を向けるように支援する。

《視点２》　互いの思いや願いを大切にできるための工夫

①　思いや願いの受けとめ

・拍手やうなずきなどを身逃さずに指導助言を行う。

・座席を考慮する。

・必要に応じて小集団の話合いを取り入れる。

②　少数意見を尊重した話合い

・よく話し合い，満場一致案を探る。

・妥協点を見いだす。

・議題の性質に合った採決方法を用いる。

《視点３》　楽しさや満足感が得られる話合いや実践ができるための工夫

①　役割の実行と協力

・一人一人が様々な役割をもてるようにする。

・役割を実行できる場と時間の確保をする。

・目標の達成を意識した活動を促す。

・協力して実践できた成就感を味わえるようにする。

・異なる個性や能力を生かし合えるように支援する。

②　活動の振り返り

・振り返りカードなどを活用する。

・効果的な終末の助言をする。

3　研究内容

実践事例１　３年　議題「スペシャルランチデーを楽しむ工夫を考えよう」

《視点１》　よりよいクラスにしようという意識がもてるための工夫

《視点３》　楽しさや満足感が得られる話合いや実践ができるための工夫

＜活動の概要＞

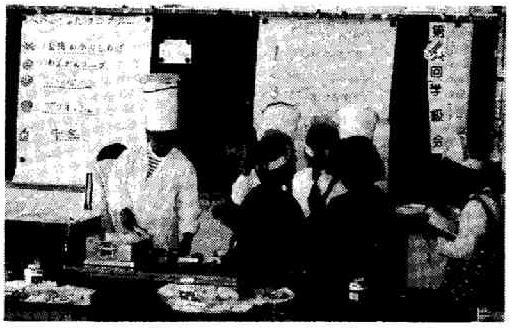
給食の時間は，生活班でグループを作り，食事をしていたが，班で給食を食べることの利点が生かされず，給食時の流れはパターン化されていた。

２学期が始まり，新しい係の活動について話し合う中で「授業や給食の時の席を考えられる係があると楽しい。」という意見があり，新しく『席＆遊び係』が誕生した。そして，係を中心に給食の時間をより楽しくするために「スペシャルランチデーを作りたい」という提案があった。楽しくするためには『どんな工夫があるか』『どんな席で食べると楽しいか』について話し合うことになった。

本時は，自信をもって発表しやすいように，事前に「学級会カード」に自分の考えを書いて話合いに臨むことにした。生活班のグループで相談したり，考えを発展させたりできるように座席を工夫した。また，クラス目標を意識して話し合うことを呼びかけた。

＜考察＞

「スペシャルランチデー」という子供たちが期待感をもてるような議題のネーミングを考えることで，子供たちは興味をもって話合いに参加し，発言も活発であった。司会グループについては，事前に進行の仕方を確認し，自信をもって話合いを進められるように励ましたことが効果的であった。



実践の成功に向けて，十分に話合いを行い，期待感を高めることができるような支援を工夫することで，クラスが一つにまとまり，役割分担はスムーズに決めることができた。また，給食の調理員さんや他の学級に配慮した意見も出され，楽しさの質の高まりも見られるようになった。

本実践の中で，一人一人が自分の役割を果たし，様々な工夫が見られ，とても充実した，満足できるスペシャルランチデーを過ごすことができた。

実践事例２　４年　議題「こどもまつりでやるお店の仕事分たんをしよう」

《視点２》　互いの思いや願いを大切にできるための工夫

《視点３》　楽しさや満足感が得られる話合いや実践ができるための工夫

＜活動の概要＞

児童会の運営による子供祭りは，４年生から出店することができる。子供たちは，３年生の時から楽しみにしてきた。お店を決める話合いでは，いろいろな意見が出た中から「けん玉」と「ミニ迷路」を作るお店に決まった。すると，「次に仕事分担を決めなければ。」という意見が出され，「子どもまつりのお店の分たんをしよう」という議題で話合いを行うことに決定した。話合いは，『①どんな仕事が必要か』『②役割分担をする』と

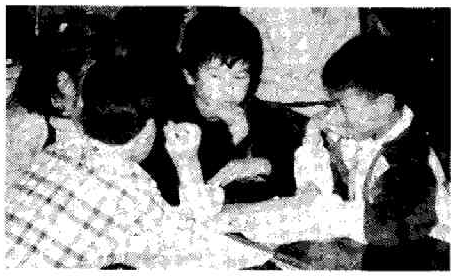
いう二つの柱で話し合うことになった。

本時は，子供たちが発言しやすいように，あらかじめ学級会ノートに自分の考えを書いておいたり，４人一組のグループにしたりして，話合いに参加しやすい雰囲気づくりをした。また，出された意見を生かし合いながら，よりよい考えを作り上げるように支援を行った。司会グループは輪番で担当し，司会進行の役割の大切さや大変さをあえて経験できるようにした。

＜考察＞

一人一人の子供が友達の考えに耳を傾け，きちんと受けとめながら自分の考えを述べる姿が見られ，互いの気持ちを認め合う話合いができた。『学校のみんなが楽しく作ったり遊んだりできるお店にする』という提案理由を意識させた話合いをするよう支援することで，様々なことに気付き，多くの仕事を考えることができた。提案理由を考えながら話し合ったため，後の役割分担では，希望者に偏りがでた時，状況を見て他の仕事を進んで引き受ける子供たちの姿がたくさん見られた。グループでの話合いは，発言を苦手とする子供にとって，自分の考えを確かめ，まとめるために有効であった。

事前に準備の時間を確保したことで，司会グループの４人が積極的にかかわり合いながら進行することができた。終末の助言では，司会グループの頑張りを賞賛し，次回の司会グループへの励ましをした。次の活動への意欲を高める上で効果的であると考えられる。



4　まとめと今後の課題

(1)　研究の成果

①　クラス目標を子供たち自身で考え，掲示したことにより，意識が深まり，クラス目標に向けた発言が多く出されるようになった。そして，協力し合うことや友達を大切にする態度が少しずつ身に付いてきた。

②　発言が苦手な子にとっては「学級会カード」や小グループでの話合いは話しやすい雰囲気を作るのに有効であった。子供たちの中に励まし合い認め合う姿が多く見られるようになった。

③　友達の意見を大切にしようという助言から譲り合う気持ちが育ち，妥協案や折衷案が出されるようになってきた。

④　司会グループを全員が経験することで司会グループの役割を知り，協力して話合いを進めることができるようになってきた。

⑤　振り返りカードや終末の助言によって，話合いの楽しさや満足感を得る子供たちが多くなった。また，次につながる意欲や活動が見られるようになった。

(2)　今後の課題

①　よりよいクラスにしようという意識を今後どう生かしていくか。

②　限られた時間内で満足感を得るために，議題や柱だてをどう工夫していくか。

③　一人一人が生きるような終末の助言をどう充実させていくか。

Ⅳ　一人一人が生きる楽しい学級活動
― 係の活動を通して ―

（学級活動高学年分科会）

1　主題設定の理由

高学年になると，学級活動を通して，自分のよさを生かしたり，友達と協力したりして，学級をよりよくするために意欲的に活動する児童が見られるようになる。一方で，自分のよさを十分発揮できないまま，活動にも消極的になってしまう児童もいる。これは，話合い→実践→振り返りという一連の流れを見通した計画的な活動ができないため，次への意欲につなげられないことが大きく影響しているのではないだろうか。

本分科会では，話合い→実践→振り返りという一連の流れを重視しながら，児童一人一人が更に意欲をもち，より楽しい学級作りへの意識を高めることができる活動として，係の活動を考えた。係の活動は，学級を高めていくための仕事を分担し合う小集団活動であることから，学級への所属意識を高めるために極めて有効な活動でもある。そして，一人一人がいろいろな役割を通して，自分のよさを発揮できる場であり，友達と深くかかわることができる場でもある。係の活動を通して一人一人のよさが生かされれば，より楽しい学級が生まれるであろう。

そのためには，特に児童のもつ思いや願いを十分に発揮できるようにしながら，友達・他の係・あるいは学級全体とのかかわりを深めていけるようにすることが必要であると考える。また，係の活動と話合い活動や集会活動とのつながりを意識できるようにしながら，月または学期にわたり見通しのある計画が立てられるような支援をすることが大切である。さらに，友達同士が認め，励まし合いながら活動を振り返ることにより「みんなの役に立ってうれしい。」「学級のみんなが喜んでくれる。」といった意識が育ち，一人一人の学級集団への所属意識も高まっていくと考えられる。

以上のことから，本分科会では，見通しをもって係の活動を進めることができるようにするとともに，互いに認め，励まし合いながら思いや願いを実現できる場を設定すれば，一人一人が生き，楽しい学級活動ができると考え，本研究主題を設定した。

2　主題のとらえ方

一人一人が生きる

○自分の思いや願いをもち活動できる。

○一人一人が役割をもち活動できる。

○自分のよさを生かすことができる。

→

←

楽しい

○自分たちで計画したことを工夫しながら実現できる。

○自分のよさが友達に認められる。

○みんなの役に立つ喜びを味わう。

○次にまた何かやりたいという意欲がもてる。

一人一人が生きる楽しい学級活動

○自分たちの力で計画・実践でき，やり遂げた充実感・成就感を味わえ，次への意欲が生まれてくる活動。
○互いの考えを認め合い，励まし合い，自分のよさや友達のよさを確かめ合える活動。
○一人一人が持ち味を発揮できる役割をもち，自分たちの創意工夫を生かすことができ，みんなの役に立つ喜びを味わえる活動。

↓

○一人一人が生かされ，より楽しい学級にしていこうとする，集団としての高まりが生まれる。
○集団の中で培われた力が，一人一人の生活に生きる。

3　研究仮説と研究の視点

研　究　仮　説

計画的，実践的な係の活動を通して，互いに認め合いながら，自分の思いや願いを実現できるようにすれば，一人一人が生きる楽しい学級活動になるであろう。

研　究　の　視　点		
（視点１） 自分の思いや願いを実現できる設置・所属の工夫	（視点２） 活動の見通しがもてるようにするための計画・実践の工夫	（視点３） 活動を振り返り，互いに認め合う場の工夫
・学級生活をよりよくしようとする意識をもつことができるようにする。 ・自分がやってみたい仕事や，学級が楽しくなったりみんなのためになったりする仕事を考えられるようにする。 ・自分の希望する係に所属できるようにする。	・係のネーミングを工夫できるようにする。 ・めあて，内容，役割を明らかにできるようにする。 ・１か月，１学期の見通しをもった計画を立てられるようにする。 ・係の活動コーナーを利用できるようにする。 ・活動時間を確保する。	・他の係と協力した活動ができるようにする。 ・自分たちの活動を振り返り，計画の見直しができるようにする。 ・活動の様子を伝え，認め合い，励まし合う場を設ける。

4　研究内容

(1)　視点１　自分の思いや願いを実現できる設置・所属の工夫の実践事例

５年　議題「クラスを楽しくする係を決めよう」

＜概要＞　まず，事前に学級生活をよりよくしようとする意識をもつことができるようにした。そのために，クラスの目標に基づいて１学期の生活を振り返り，２学期はどんなことをがんばったらよいのか，さらに係の活動を通してどのようなことができるかを話し合った。係の設置の際には，自分がやってみたい仕事や，学級が楽しくなったりみんなのためになったりする仕事を考えられるようにし，「○○係を作りたい。」ではなく「こんな仕事をしてみたい。」と，具体的な仕事の内容を挙げた。また，他の学級の係の活動に関する情報を児童に与え，参考にした。係の所属の際には各係に人数や男女の別などの制限を設けずに，自分の希望する係に所属できるようにした。偏りが大きい場合には，活動しやすいかどうかを児童に投げかけ，考えられるようにした。やってみたいと思う児童がいない係はなくしてしまうのではなく，どうしたらよいかを考え，他の係が兼務するなど児童の考え出した仕事を生かすことができるようにした。

＜考察＞　係の設置の際に「こんな仕事をしてみたい。」と，具体的な内容を挙げたことは，仕事の内容に対する共通理解が図れ，有効であった。係が決まり，実際に仕事に取りかかる際もスムーズであった。また，児童に与えた他の学級の係の活動に関する情報は，児童の思考を広げる助けとなった。係への所属では，希望する係に所属できるようにしたため，どの児童も意欲的に活動することができた。人数や男女の偏りもみられるが，人数の少ない係は他の係に協力してもらって活動するなどのプラス面も見られる。また，人数の多い係は係内での仕事分担をはっきりさせて取り組むことで，一人一人の児童が十分に活動できるようになった。挙げられた仕事のうち，やってみたいと思う児童のいないものもあったが，他の係が兼務する，当番として取り組む，学級全体で取り組む，などと決まった。なお，５年生の４月の時期の係の設置についての話合いは，よりよい学級作りを意識できるようにし，係の活動の意味が理解できるようにするためにも，教師が司会をして進めることが有効であると考えられる。

(2)　視点２　活動の見通しがもてるようにするための計画・実践の工夫の実践事例

５年　活動名「１か月の計画を立てよう」

＜概要＞　新しい係に所属した後，係の成員で親しみのもてる係名を工夫した。次に，めあて・仕事の内容・役割を考え，係のポスターに書き入れた。友達が見ることができるように，係の活動コーナーを設けて掲示した。よく分からない児童には，各係に対して質問ができる機会を設けた。さらに，仕事の内容についても友達の要望を聞き，活動計画を立てる際の参考となるようにした。各係で１か月の計画を立てる際に，「学級活動カレン

ダー」を活用した。この中には，月別の行事や学級活動の日，係の活動の予定日をあらかじめ書き込み，活動計画を立てる際の参考となるようにした。なお，活動計画を立てる前に，友達からの質問と要望に対して係としてどうするか，について答えた。その後，各係で１か月の活動計画を話し合い，最後に発表した。記入した「学級活動カレンダー」は係の活動コーナーに掲示した。

10月学級活動カレンダー〔ハリネズミくん〕

学級活動のある日・・・○　係活動のある日・・・◎

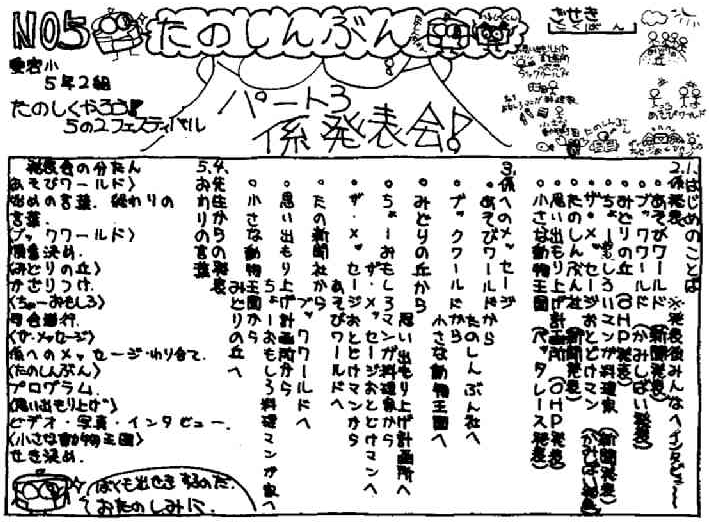
日	曜	活動計画	役割	係	日	曜	活動計画	役割	係
1	火				16	水			
2	水				17	木	賞品かんせい	N.O	
3	木	話合い			18	金	代表委員会 クイズづくり	N.O	○
4	金			○	19	土			
5	土	前日準備			20	日			
6	日	運動会			21	月	クイズのじゅんい発表	M.O EM	
7	月				22	火	問題をだす	M.S	
8	火				23	水			
9	水	クイズかいし			24	木			
10	木				25	金	授業参観 問題のまとっけ		○
11	金	話合いどこう	みんな	◎	26	土			
12	土				27	日			
13	日				28	月			
14	月	委員会 クイズの賞品づくり	N.O		29	火	問題を出す	M.S	
15	火				30	水			
					31	木			

＜考察＞　係のめあてを考え，掲示したことは，活動の内容がよく分かる，係の活動を振り返るときのめやすになる，学級の友達から適切な助言や励ましを受けることができる，といった点で効果があった。１か月の計画を立てる際に友達の要望を聞いたことは，活動をする係の成員の意欲を高めたり，活動を受け入れる友達の係に対する期待を高めたりして有効であった。「学級活動カレンダー」については，月別の行事などが明らかになり，係の活動計画を無理なく立てることができ，仕事が進められた。さらに，それを発表し，掲示することで学級の友達にも係の活動の様子がよく分かるようになった。友達が頑張っている様子・自分が頑張っている様子を認め合う機会が増え，友達同士の交流も深まってきた。これらのことからも，活動計画を立て，それを明示するということは，大変重要である。一方活動時間は，１か月に１回の学級活動と１週間に１回の朝自習などを係の活動に充てた。しかし，活動が活発になるほど不足しがちとなった。その時間の確保も含めた在り方が課題として挙げられよう。

(3)　視点３　活動を振り返り，互いに認め合う場の工夫の実践事例

５年　集会活動名「楽しくやろう５の２フェスティバル　パート３　係の発表会」

＜概要＞　学級目標を目指して学級活動のめあてを出し合った。集会の活動では，「クラスがもっと楽しくなるようにこのクラスだけで５の２フェスティバルをしたい。」「アピールなどして，みんなに楽しく係を知ってもらう発表会をしたい。」の意見が出た。各係が意欲をもって活動していたが活性化につながるよう，係の発表会をもった。話合いでは発表内容として，仕事やメンバーの紹介・新しい活動・自慢や特だねのほかに，



協力したことや工夫したこと・見ていない所で頑張ったことなどの意見が出た。本時まで各係の活動状況を把握し，見守ったり励ましたりした。児童は，日常の活動と兼ね合わせながら楽しく協力し，ほかの係の活動にも関心をもって進めていた。本時は，①始めの言葉（めあて）②各係の発表（ＯＨＰ・紙芝居・新聞など）③インタビュー（質問・よかったところ・アイディア）④係へのメッセージ（係ごとに手紙・歌と踊り・賞状・メダルを贈る）⑤担任から（活動の過程の写真を見せ，賞賛する）⑥終わりの言葉，の流れで進めた。児童からは，「取材は大変そうだったけどいい記事が載っている。」「いつも楽しいことを計画してくれてありがとう。」などの声があった。どの係も工夫し，一人一人が活躍できた楽しい会だった。

＜考察＞　特に，次のことに重点を置いた。①成長した点をその中心に置く。②積極的に「よさ」を見いだすようにする。③児童の満足感を重視する。

○　「振り返りカード」は，自分や係の名前が出てほめられると意欲がわくことや，みんなの意見を聞いて活動の見直しができたことで，効果があったと考えられる。また，発表会では，互いのよさを全体で認め合ったり，係が互いに協力したことで，学級への所属意識が育ち，学級目標の実現への意識をもつことができたと考えられる。

○　児童の感想に，「体中にみんなの拍手が飛び込んできてうれしかった。」「楽しかったので，またやりたい。」とあった。本時の活動を基にして，更によい実践が行えるよう，継続的な励ましをしていきたいと考えている。

5　まとめと今後の課題

(1)　研究の成果

①　自分の思いや願いを生かして係を作り，所属できるようにしたことにより，活動内容に広がりができ，一人一人が生き，楽しく活動することができた。

②　見通しのある活動計画を立てられるようにしたこと（活動時間の確保・係コーナーの設置・学級活動カレンダーの活用）により，互いに協力しながら，創意工夫した活動ができるようになり，更に自主的に活動しようとする意欲を高めることができた。

③　認め，励まし合いながら活動を振り返る場を設けたこと（振り返りカードの活用・発表会）により，自分のよさや友達のよさを見付け，学級をよりよくしようとする意識を高めることができた。

④　係が互いに協力できたことで，学級成員としての所属意識が育ち，さらに学級目標の実現への意識をもつことができた。

(2)　今後の課題

①　限られた時間数の中で，子供たちの意欲を更に生かした創造的な活動を，どのように支援すればよいか。

②　学級内での係の活動で培った力を，高学年としてよりよい学校を作ろうとする意識にまで高めるには，どのように支援すればよいか。

③　学級集団への所属意識の高まりを，児童一人一人について評価するには，どのような方法が適切か。

V　児童が主体的に取り組む児童会活動
― 課題意識を高め，協力し合う児童会活動の指導の工夫 ―

（児童会活動分科会）

1　主題設定の理由

児童会活動は，特別活動の《望ましい集団活動を通して，なすことによって学ぶ教育活動》という特質を最も発揮できる活動であると言っても過言ではない。したがって，その活動は全校的視野に立って行われ，互いのよさや成果を認め合い，励まし合い，高め合う異年齢集団でなければならないと考える。

最近の児童の実態を見てみると，自分の考えをはっきりと述べたり，与えられた仕事をまじめにやり遂げたりするよさをもっていることが分かる。しかし，そのよさの反面，教師の指示を待つことが多い児童や自ら進んで考え，行動することができない児童の姿が浮かび上がってくる。また，他と協調したり，他を思いやる気持ちが薄く，自己中心的で社会性に乏しい姿も多く見られる。

児童会活動の様子から，児童が主体的に活動することが少なく，常時活動では工夫があまりなく，マンネリ化傾向が見られる。また，委員会活動に所属していない低学年児童の理解と協力を十分に得ていない実態も浮き彫りになる。それは，児童会活動に対する創意工夫の不足，所属感の稀薄，参加意識の低下等が原因と考えられる。

そこで，児童がこれからの社会にたくましく生きていくためには，

○自分のよさや可能性に気付き，人のために役立とうと積極的に行動する児童

○進んで人とかかわり，主体的に活動し，楽しい学校生活を創造的に築いていく児童

を育てることが，大切であると考えた。また，友達と知恵を出し合い，協力し合う体験を積み重ねることを通して，社会性を育てることもたくましく生きていくには必要であると考える。

以上のことから，児童の課題意識を高め，協力して取り組む指導の工夫をすることにより，児童が主体的に取り組む児童会活動の活性化を図ることができると考える。そして，楽しく参加し，活動することを通して児童に主体性や社会性を育てていくことが，児童会活動の目標達成に結び付くと考え，本主題を設定し研究を進めることとした。

2　研究仮説と研究の視点

(1)　研究仮説について

主として高学年児童が運営する児童会活動において，「みんなの役に立てたこと」に喜びを感じる児童は多い。しかし，意識して自分を高めるために目標をもったり，全校児童のために課題意識をもって創意工夫できる児童は少ない。このことから，自分たちの願いが実現できた喜びや役割を果たしきった楽しさの体験などを積み重ねることにより，児童一人一人に学校生活の楽しさを実感させることが必要である。

そこで，児童が互いに認め合い，支え合い，高め合える異年齢集団活動を工夫することにより，一人一人が課題意識をもち，主体的に活動できると考えた。

研究仮説

課題意識をもって役割を遂行し，みんなの役に立てたことの喜びを実感すれば，協力し合い主体的に取り組む児童会活動となるであろう。

(2) 研究の視点について

児童は，「自分たちの活動が学校生活の充実・向上に一役買っている。」という実感をもてたとき，これまでより以上の主体性を発揮するものである。そして課題意識が高まり，児童会活動が活性化するものと考える。

異年齢集団による児童会活動では，自分たちの生活を見直し，よりよくするための場や全校児童が楽しむための活動の場を設定する必要がある。その活動の中で，互いのよさを認め，協力し合う人間関係づくりを目指したい。

視　点

①課題意識を高める工夫
- 計画段階の工夫　（活動のイメージ化，全校児童を意識した活動計画）
- 情報の共有化　（全校児童の意見の吸い上げ，広報活動の工夫）

②役割遂行への支援
- 役割分担　（個性や特性に応じた役割分担，励ましの言葉かけ，創造的な活動）
- 協力体制　（共感できる活動体験，教え合い支え合える集団，教師の共通理解）

③貢献体験の場の設定
- よさの認め合い　（認め合う場や機会の確保，満足感，成就感の味わい，連帯意識）
- 自己評価　（自己の活動の振り返り，他者からの評価の受け止め）

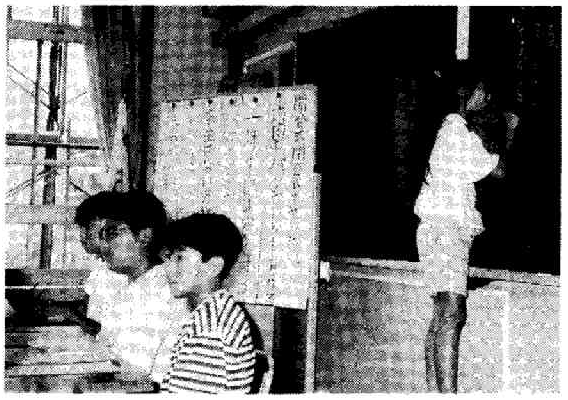
3　研究内容

実践事例１　題材「鶴巻小まつりを成功させよう」　（代表委員会）

視点②　［役割遂行への支援］

○互いに教え合い，支え合う集団づくり

＜活動の概要＞　鶴巻小まつりは，全校が楽しめる集会活動として児童の意欲も高く，主体的に取り組める実践的活動であると言える。しかし，前期代表委員会の話合い活動を振り返ってみると，積極的な意見交換が少ないという実態があった。



そこで，縦割りのグループを作り，上級生と下級生が協力して活動できる場を設定した。また，低学年が十分楽しめなかったという反省から，「低学年から高学年まで楽しめる工夫」を話し合った。その中で，「お金は必要か」「スタンプラリーをしよう」「わかりやすくするために，地図を作ろう」などたくさんの意見が出された。さらに，必要な

仕事を出し合い，「開閉会式」「宣伝」「低学年への連絡」などの係を進んで考えることができた。

＜考察＞　グループでの話合いを経験していく中で，３年生も質問をしたり，意見を言ったりするようになってきている。振り返りカードにも，「代表委員会がだんだん楽しくなってきた」と書いていた。また，上級生がそれぞれのグループでリーダーシップを発揮して意見をまとめたり，日程表を見ながら見通しをもち，進んで取り組む姿が見られた。

以上のことから，縦割りのグループに分かれて仕事に取り組む場を設定したことにより，児童が互いに教え合い，支え合いながら活動できるようになっていくことが確かめられた。

実践事例２　題材「後期集会委員会のめあてをもち，活動計画を立てよう」

視点①　［課題意識を高める工夫］

○全校児童を意識した活動計画の作成

○全校児童に活動内容を知らせる広報活動の工夫

視点②　［役割遂行への支援］

○仕事内容の理解や創造的な活動への励ましと助言

＜活動の概要＞　集会委員会では，全校児童が仲良く楽しく過ごせる『金曜子供集会』を目指して計画を立ててきた。しかし，１５分という短時間で全校児童が満足感を味わえる集会にすることの難しさが，前期の課題として残った。

そこで，後期に初めて集会委員になった５年生のためにも『集会委員会のめあて』を確認させた後，集会を盛り上げるための話合いを行った。その結果，「ゲームの工夫」「次の集会の宣伝」「よく伝わるための司会や説明の練習」が必要であることに気付き，一回一回の集会を工夫していくことやグループ間の協力などによって，全校児童が興味をもって参加してくれる集会にしようと確認し合った。

＜考察＞　話合い後すぐに，全校児童にアンケートを取り，図書や他校の例を参考にすることによってゲームに工夫が加わった。また，ポスターで全校に知らせ，各学級に説明に行くなどの広報活動にも積極的な取組みが見られた。

以上のことから，全校児童を意識した活動計画の作成や広報活動を通して，集会委員会としての課題意識を高めることができた。また，教師の励ましや助言が各自の役割を最後まで遂行する力に結び付けていることも明らかになった。

実践事例３　題材「『目白まつり』の反省をしよう」　（代表委員会）

視点③　［貢献体験の場の設定］

○互いのよさや成果の認め合い

○活動の振り返りと他者からの評価

＜活動の概要＞　『目白まつり』を第一部のセレモニー，第二部のお店やさんに分けて行った。そして２日後，各自の「ふりかえりカード」や各クラスの反省や感想，朝会時に活躍を賞賛してくれた校長先生の言葉や先生方の活動に対する励ましの言葉や手紙を基に活動を振り返った。

□　係の仕事について
・校庭で遊んでいてもスローガンがよく見えていた。
・最後まで仕事を協力してできた。

□　自分ががんばったこと
・進んで係になった。
・低学年にもわかる言葉で文を作った。

□　改善点
・プログラムの見えにくかった色。
・聞こえにくかった放送の合図。
※記録に残して来年に生かすことを確認し合う。

□　友達のがんばったこと。
・意外性のあるクイズの問題作り。
・3，4年生が積極的な働きをした。

□　活動後の感想や意欲
・協力して活動した快さを味わった。
・この次は自分も司会をやってみたい。
・みんなが楽しんでくれたのでがんばって仕事をしてよかった。
・「おもしろかったよ」と言われてうれしかった。
・先生が仕事をほめてくれたのでうれしかった。

＜考察＞　『目白まつり』の2日後という早い時間に振り返りの時間をもったことは，自分たちの活動の良い点や改善点を鮮明に思い出すことができ，成員同士の互いのよさや成果を認め合うことができた。また，「クラスの声」や校長先生や先生方からの励ましの言葉，賞賛の言葉，手紙などは自分たちの活動が人の役に立ったことの喜びを感じさせたり，次回からの役割分担への意欲付けに大きな効果があった。

以上のことから，貢献体験を語り合う場を設定し，成員以外の声を前向きに受け止めながら認め合う機会を作ることは，今よりも一歩『主体的に活動する児童』に近付くものと考える。

4　まとめと今後の課題

(1)　研究の成果

視点1　課題意識を高める工夫
・活動のイメージ化を図り，全校児童を意識した活動計画を立てることで，児童が主体的に取り組むことができた。

視点2　役割遂行への支援
・異年齢による小グループの話合いや活動の場を設定することで，児童が互いに教え合い支え合い，高め合える協力体制を築くことができた。

視点3　貢献体験の場の設定
・活動を振り返り，成員同士が互いのよさや成果を認め合い，全校児童から評価される貢献体験の場をもつことが，主体的に取り組む児童会の発展につながる。

(2)　今後の課題

①　児童自ら創造的活動ができるようになるには，教師の温かい「言葉かけ」や「参考資料の提示」などの適切な支援の在り方を追究することが必要である。

②　異学年が協力し合って活動するには，時間の確保が必要であり，そのためには教師間の密なる連絡や協力体制を確立するための方法を明らかにすることが重要である。

③　活動の成就感を全校児童と共有するために，「伝達する方法」を更に工夫し，みんなのために意欲的に活動する気持ちを育てていくことが課題である。

Ⅵ　行事精選の中で，児童の心に残る学校行事にするための事前・事後指導

（学校行事分科会）

1　主題設定の理由

学校週５日制の実施に伴い，授業時数確保のために『行事精選』に目が向けられ，数多くの行事が見直されたり，姿を消したりした。そのような状況にあって，これからの学校行事は，それぞれの行事のもつ『ねらい』をより明確にして，一層価値のある活動にしていかなくてはならない。

学校行事分科会では，児童自身が楽しかった・満足できた（充実感），やってよかった（成就感），またやってみたい（次への意欲）というような，児童の心に残る学校行事にするために，事前・事後指導に焦点を当てて研究を進めようと考え，本研究主題を設定した。

2　研究仮説と研究の視点

(1)　研究仮説

学校行事精選が叫ばれている中で，それぞれの行事のもつねらいを明確にし，事前・事後指導を工夫し充実すれば，児童の心に残る学校行事にすることができるだろう。

(2)　研究の視点

下記のような児童を育てるために，①～③のように研究の視点を設定した。

学校行事を通して目指す児童像（児童の心に残る学校行事）

・めあてをもち，見通しをもって取り組める児童
　（目的意識を育てる・真剣さを育てる）
・多様な考え方で，主体的に取り組める児童
　（自主性を育てる・判断力を育てる）
・自分の役割を自覚し，責任をもって行動できる児童
　（責任感を育てる）
・相手の考えや立場を尊重し，互いに協力し合い，高め合うことができる児童
　（社会性を育てる）

①　行事のねらいを明確にする。

行事を通して『児童に身に付けさせたいこと。育てたい心。』等，それぞれの行事のねらいを明確にすることが大切である。それによって，ねらいを達成するためのよりよい方法や教師間の共通理解が図れ，目指す児童像が一つになると考えた。

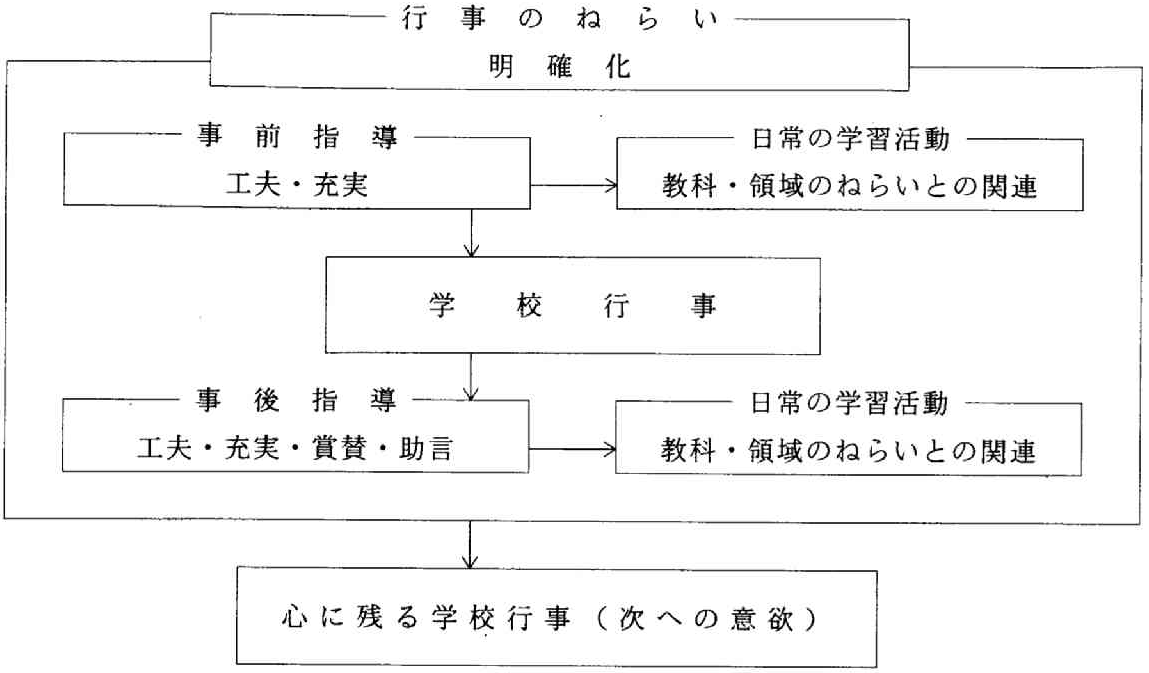
②　事前・事後指導を工夫し，充実させる。

『でき上がり』だけに目を向けるのではなく，それまでの過程における事前指導や，ねらい達成に基づいた事後指導の工夫と充実が大切である。それによって，次回の行事への期待感と意欲を喚起することができ，学校生活の充実と発展がみられるようになると考えた。

③　日常の学習活動との関連を図る。

行事と教科等との関連を図りながら，事前・事後指導を行うことが大切である。それ

によって，ゆとりをもった行事への取組みが可能となると考えた。



(3) 研究の具体的な手だて

① 事前のアンケートによる意識調査

児童がより意欲的に行事に取り組み，活動できるよう，事前に行事に対して意識調査を行い実態を把握し，個に応じた指導を行う。

② 行事学習カードの活用

行事のねらいを理解し，めあてがもてるように，『いつ，どこで，何をどうするのか』という見通しを明確にするために，行事学習カードを活用する。行事学習カードの中の一言感想欄には，児童への励ましや賞賛・助言などを書き込み，意欲の向上を図る。さらに，めあてに向けて努力したことや，友達との協力などですばらしい感想があったとき，それを賞賛し，クラス全体に広める。

③ 教師の賞賛と助言

目立たないところで努力している児童や，一人一人の意識の高まりに目を向け，それを賞賛し，助言をすることにより，他の児童が友達のよさに気付くようにさせる。

④ 行事振り返りカードの活用

『行事のねらいが理解でき，自分（班やクラス）のめあてが達成できたか。』，また『見通しをもち意欲的に活動できたか。』を確認するために行事振り返りカードを活用する。そして，自由記述欄の児童の声を次の行事へと生かすようにする。

⑤ ビデオ，写真，資料の活用

行事への意識付け，活動のイメージ化のために，ビデオ，写真，資料を活用する。

⑥ 事前・事後指導の時間の確保

教科等のねらいと関連させることにより，充実した行事の事前・事後指導の時間を確保する。

3　研究内容

(1)　実践事例　健康安全・体育的行事（なかよしスポーツ大会）

行事のねらい

・スポーツを通して，体力の向上を図る。
・集団行動のルールを身に付け，協力して楽しい一日を過ごす。
・学年，学級の壁を越えて協力し合い，連帯意識を高める。

事前指導

・事前アンケートの実施
・班作り，班長の決定
・学年スポーツ実行委員の選出
・『行事学習カード』の記入
・実行委員会の計画，提案
・クラスのめあて，学年種目案
・学年合同学級会で，学年種目決定，チーム作戦会議
・愛校心，公正公平の心情育成
・班のめあてや遊びの計画
・目的地までのコース確認
・異学年学級との交流
・学年種目のチーム練習
・全校ダンスと歌の練習

日常の学習活動

・児童集会
・朝の会
・道徳
・体育
・休み時間
・学級活動
・なかよし給食会
・なかよし班長会
・なかよし班会議
・創意の時間
・帰りの会

↓

学年行事

なかよしスポーツ大会

↓

事後指導

・めあてに向けて頑張った点の賞賛
・班長，実行委員の活躍へのねぎらいの拍手
・事後アンケートの実施
・『行事振り返りカード』による自己評価

日常の学習活動

・朝の会
・当日の帰りの会

↓

心に残る学校行事

○考察

実施前には半数しか『好き』と答えていなかった『なかよしスポーツ大会』であったが，実施後には8割の児童が『好き』と答え，十分に満足することができた。これは，事前指導で児童の内面も含めて指導したこと，事後指導ではよかった点を中心にほめたことの効果と考えられる。

(2) 実践事例　儀式的行事（４０周年記念式典）

行事のねらい

・４０年の歴史を振り返り，母校愛を深める。
・地域社会の人々と共に４０周年を祝い，地域に根ざした学校としての誇りをもたせる。
・先人の築き上げた足跡に感謝する気持ちをもち，それを引き継ぎ，更によりよい学校を築き上げようとする意欲を高める。

事前指導

・事前アンケートの実施
・『行事学習カード』の記入
・呼びかけ練習
・歌の練習
・式典の流れの練習

→ **日常の学習活動**

・朝の会
・休みの時間
・音楽
・帰りの会

↓

学校行事

４０周年記念式典

↓

事後指導

・式後の賞賛
・事後アンケートの実施
・作文
・『行事振り返りカード』による自己評価

→ **日常の学習活動**

・当日の帰りの会
・国語
・家庭学習
・朝の会

↓

心に残る学校行事

○考察

児童代表として6年生が式典に参加した。児童の言葉に『めあてに書いたとおり，感謝の気持ちを忘れずに参加できました。』『式典が終わって式典をやってよかったという気持ちになった。たぶん，それは一生懸命に取り組んだからだと思います。』『式典が終わり，6年の全体の練習（呼びかけ・歌）がなく少しつまらないです。』など，めあてを意識し，参加してよかった（満足感），やってよかった（成就感）という声が多く聞かれた。これは，式典のねらいを明確にし，事前・事後指導の充実と，教師の助言・賞賛によるものと考えられる。

＊式典が終わりました。どんな感想をもちましたか。素直な気持ちで簡単に書いてみてください。

40周年の記念式典がこんなに大きなものだとは思いませんでした。歌も大きな声で歌えたし、呼びかけもはっきりとした大きな声で言えました。成丘が建って今まで40年間の歴史などもわかりました。

地いきの人々の熱いねがいでできたんだから、これからもずっと成丘があったらいいです。

4　まとめと今後の課題

(1)　研究の成果

視点①　行事のねらいを明確にする

行事精選が進められる中，行事のねらいを明確にすることによってその行事の必要性が再認識され，ねらい達成のための手だてを講じる上で，教師間の共通理解が図られた。また，児童もそれを受けて自分（班や学級）のめあてをはっきりともち，それを意識して頑張ることができた。

視点②　事前・事後指導を工夫し充実させる。

行事学習カードや行事振り返りカードの活用を中心にして，事前・事後指導を充実させたことによって，児童は意欲的に行動に取り組み楽しく活動できた。また，事前・事後に行ったアンケートから，行事実施の前と後では，その行事が『好き』と答える児童の数がかなり増えることが明らかになった。

視点③　日常の学習活動との関連を図る

その行事のねらいと一致する教科・領域等の時間を有効に活用することによって，教科時数を確保しながら行事に取り組むことができた。

(2)　今後の課題

・学校週5日制に伴う学校行事の精選において，行事のもっているねらいをより明確にし，その教育的価値を見直す必要がある。

・事前，事後指導の充実に向けて『行事学習カード』『振り返りカード』を工夫，改善し実践に生かす。

・事前，事後指導の時間と場の確保のために，行事と教科等との関連を図った年間指導計画の作成が必要である。

・全校ないし学年という大きな集団での活動であることから，学校の協力体制を確立する。